

仙台市文化財パンフレット第23集

禁

仙台の由緒ある町名・通名

辻標のしおり

文久2年(1862)仙台城下絵図

1990

はじめに

仙台の地名には、伊達政宗のもとで城下町として成立して以来の古い歴史をもつものが数多くあります。しかし、それらの中には、急激に都市化が進む中で忘れられようとしているものも少なくありません。辻標の設置事業はそうした由緒ある町名や通名を後世に永く伝えていくために始まりました。始まったのは市制施行八十八周年を迎えた昭和五十二年で、最初の一基「勾当台通／表小路」が市役所前に建立されたのはその年の十二月二十七日のことです。以来毎年数基ずつ建立され、その数は平成元年度までで六十九基になっています。

今では仙台の景観にすっかり溶け込み親しまれているようで、一つ一つ写真に撮って歩かれる市民の方もいるようです。また刻まれている内容等に関する問い合わせも数多くいただいています。この小冊子はそうした方々の御要望にお応えするとともに、より多くの方々に辻標に親しんでいただくために作成しました。皆様のお役に立てば幸いです。

※辻標の仕様

- 材質 稲井石（宮城県産）
- 形状 四角柱 高さ 一五〇センチメートル
幅・奥行 二五〇センチメートル
- 町名・通名の選定は郷土史家等からなる「由緒ある町名、通名と八十八選定委員会」を組織して行い、説明文の作成も委員会の先生方をお願いしています。

一、城下町仙台的形成

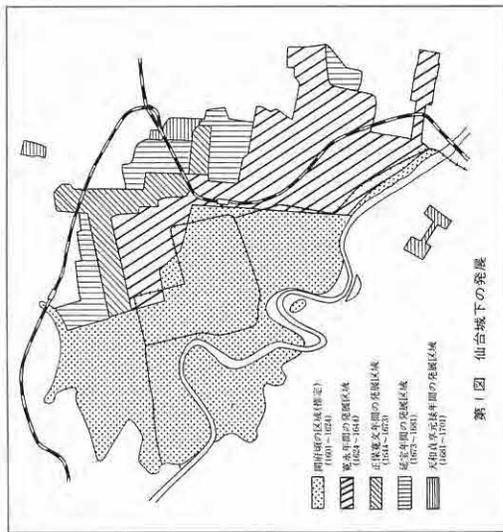
慶長五年（一六〇〇）十二月伊達政宗は仙台城の築城を開始しました。それに伴い旧城下岩出山に住む士民は残らず仙台に移るようになり、城と城下町の建設は彼らの手によって進められたのです。

城下町は城の東を流れる広瀬川の段丘上から東にかけて計画されました。それまでこの地域は、宮城郡荒巻・小田原・南目・小泉、名取郡根岸の五カ村入会の原野や谷地でした。

まず、城の大手から東を見通して広瀬川の仙台橋（大橋）の先の大町通りの東西幹線が割り出され、これと芭蕉の辻で直交する形で国分町・南町の南北幹線が割り出されました。城下の町屋敷や侍屋敷などはこれを基準に建設されたのです。

広瀬川西岸の川内には、大身の侍屋敷と旗本足輕屋敷が割り出され、狭義の仙台城を守備する形を採りました。また、広義には、広瀬川をいわば外濠として、川内までが城の内とされました。広瀬川東岸の段丘上（片平丁）及び北岸の段丘上（中島丁）には、大身の侍屋敷が配置されました。

芭蕉の辻を中心に、東西には大町・日形町（後には新伝馬町）、南北には北から二日町・国分町・南町・北目町・染師町・田町などが連なり、また国分町の西側には肴町・立町・柳町・荒町・鍛冶町・材木町などの町が置かれました。これらはいずれも町人町です。国分町・南町の路線から東側には、南北に東一番丁以東のいわゆる東番丁が、二日町以北の西側には東西に北一番丁以北のいわゆる北



番丁が割り出されました。これらはともに中級侍大番士クラスの屋敷です。新伝馬町の東には、伊達郡から移った中世以来の伊達直属の下士である名懸衆の屋敷が続きました。

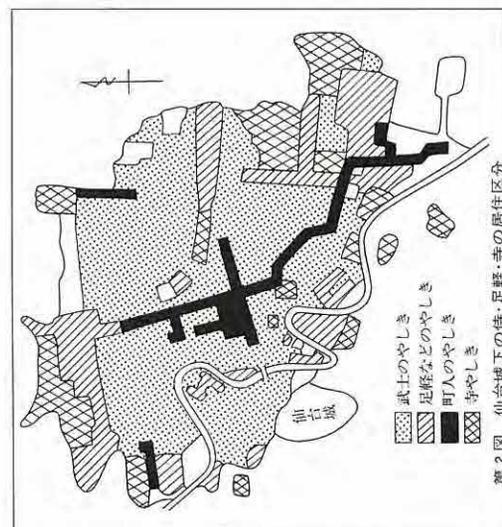
北山には東昌寺・光明寺・覚範寺・輪王寺・満勝寺など、

多くはかつて伊達郡において、鎌倉期以来伊達氏の菩提寺となっていた由緒ある寺々が並びました。また、現在の県庁あたりに建立された定禅寺から南東にはほぼ現仙台駅前近くにかけても寺が建ち並び、寺小路と呼ばれました。これらの寺屋敷は、侍屋敷の外縁部に置かれた柴田町や二十人町・鉄砲町・堤町・北五十人町などの足輕屋敷とともに、城下の守備の役割も果たしたのです。なお、慶長十二年には城下北西に大崎八幡の華麗な社殿が落成、引き続き別当龍宝寺とその門前の八幡町もできました。

城下町の建設は慶長十五年頃には一応の完成をみましたが、その後拡張がしばしば行われました。まず寛永五年（一六二八）に政宗が晩年の居館として若林城を築造した際、この方面への拡張が行われ、荒町が現在地に移されたほか、南鍛冶町や穀町などが割り出

れました。また、柳町も南町と北目町の間の現在地に移され、従来の荒町・柳町の地はそれぞれ本荒町・元柳町と改められて共に侍屋敷となりました。若林城周辺には諸士の屋敷が配され、小城下町を形成しましたが、寛永十三年の政宗の死後城は廃され、諸士も仙台城下に戻りました。

寛永十四・五年頃には寺小路の東辺にあった寺々が八ッ塚に移されて新寺小路となり、新城下の東辺の守りとして付近に足輕屋敷が配されました。この間、開府時には概ねブロック状に配置されていた町屋敷は奥州街道に沿うように移動し、場合によっては鍛冶町・材木町などのように南北に二分されるものも生じました。以上の結果、寛永末年（一六四四）までには、城下の町人町の配置がほぼ決定しました。



次いで、正保から寛文年間（一六四四～一六七三）にかけて、主として城下北東部に若干の町が割り出されました。特に承応三年（一六五四）の東照宮造営に伴って、その門前に宮町が生まれたほか、北五・六番丁、鉄砲町なども割り出

辻標一覽表

No.	設置年度	町名・通名	設置場所
1	S 52	勾当台通/表小路	市役所前
2	"	東三番丁/鉄砲横丁	五橋公園内
3	"	北一番丁/二本杉通	上杉健康広場内
4	"	肴町/大町三丁目横丁	肴町公園内
5	"	北四番丁/上杉山通	勝山公園内
6	"	東一番丁/定禅寺通	定禅寺通公園内
7	S 53	同心町中丁/大仏前	錦町公園内
8	"	元常盤丁/定禅寺通櫓丁	市民会館前
9	"	立町/元柳町	西公園内(広瀬通角)
10	"	柳町/教楽院丁	大日如来境内
11	"	長刀丁/外記丁	合同庁舎前
12	"	支倉丁/支倉通	氏家氏宅前
13	"	北山町/通町	通町公園内
14	S 54	堤通/北二番丁	日高ビル前
15	"	上染師町/五橋通	加藤商店前
16	"	新坂/新坂通	知事公館前
17	"	北三番丁/細横丁	北三番丁公園内
18	"	北目町/北目町通	よろず屋酒店前
19	"	良覚院丁/本荒町	晩翠草堂前
20	"	南町/電話横丁	テレフォンプラザ内
21	"	滝前丁/北五十人町	来迎寺前
22	S 55	錦町/光禅寺通	ホテルメイフラワー前
23	"	片平丁/琵琶首丁	仙台大神宮前
24	"	国分町/大町	日本銀行仙台支店前
25	"	東二番丁/青葉通	長銀前
26	"	米ヶ袋/鹿子清水通	佐藤茂氏宅前
27	"	狐小路/南町通	仙台高裁前
28	"	中島丁/角五郎丁	澁橋西側
29	S 56	田町/清水小路	ショウケイビル前
30	"	東六番丁/花京院通	東六番丁小前
31	S 57	木町通/北六番丁	東北大学歯学部東南角
32	"	江戸町/坊主町	八幡四丁目エントー前
33	"	花壇川前丁/琵琶首新丁	東北電力日新寮角
34	"	穀町/畳屋町	穀町保育園前
35	S 58	連坊小路/長泉寺横丁	モリヤ和洋菓子店前

されました。

仙台北城下が最も発展したのは、四代藩主綱村の時代(二六六〇)一七〇三)です。まず北部では北六番丁以北、東部では小田原方面に侍屋敷が割り出されました。また、天和年間(二六八一)八四)には、中世以来伊達氏に厚く信仰され、伊達郡より元寺小路に移されていた梁川今八幡が川内の亀岡に移されて亀岡八幡となり、その門前町が発達したほか、元禄年間(二六八八)一七〇四)における城下東郊榴ヶ岡の釈迦堂の造営に伴っても門前町が発達しました。

このようにして形成された、仙台北城下の最盛期の人口は六万人前後とみられています。しかし、その後度重なる飢饉等によって城下は衰退し、空き屋や畑となる家作が増え、人口は五万人程度となったままほとんど回復することなく明治維新を迎えました。仙台の市街が藩政盛期の人口を回復するのは実に明治二〇年(一八八七)のことです。

二、仙台の町名称の原則

仙台の町名にはそれぞれ固有の由来があり、多種多様ですが、中には原則のようなものがあり、それに従って命名され、呼称されてきたものもあります。そこでその主なものを列記してみましょう。

- ① これは日本の城下町の呼称の習慣ですが、城の大手筋に向かった方向の町を縦町と呼び、これらと直交する町を横町といいます。仙台では東西に通ずる大町とか立町が縦町で、南北の通りである細横丁、伊勢屋横丁、大日横丁などが横町ということになります。しかし後にはそれに関係なく幹線に直交する町を横町と呼ぶよう

になり、例えば虎屋横丁や玉沢横丁は東二番丁や国分町に対しての横町の意味で名付けられたものです。

- ② 仙台では侍屋敷のあるまちを「丁(ちょう)」と呼び、足軽や町人の住むまちを「町(まち)」と呼びました。「町」とかいて「ちょう」と発音するのは「通町(とおりちょう)」・「穀町(こくちょう)」ぐらいで、「国分町」も「こくぶんちょう」ではなく「こくぶんまち」と呼ぶ方が正しいのです。
- ③ 「く通(とおり)」というのは「く町」へ通ずるということで、これは直線に通ってなくてもそう呼びました。立町通は立町に、堤通は堤町に、南町通は南町に通じている通りです。しかし中には光禅寺通や花京院通のように、そこにあった寺などの名に因むものもあります。
- ④ 「本く町」あるいは「元く町」という呼称は、ある町が他の地域に全面的に移された場合、その名もまた移動することになるので、もとはく町であったということに付けられた町名です。これには、本荒町、本材木町、元柳町などがあります。ただし寺小路の場合は、そこにあった寺院の全てが移されたのではなく、西部の寺院はそのまま存在していたので、移されて新しくできた町には「新」の字がつけられ、「元寺小路」に対して「新寺小路」となりました。
- ⑤ 一番丁、二番丁という呼称は大手筋を基準として呼び、また城下町の拡張を意味するものです。

※この稿は「仙台市史」菊池勝之助著「仙台地名考」小林清治編「仙台城と仙台領の城・要害」(図版1・2含む)に基づいて作成しました。

一番

表小路 (おもてご)

文化十四年(一八一七)、勾当台通に面して藩校養賢堂の表門が造られ、以降、国分町から表門までの小路を表小路といった。明治十八年仙台区役所ができ、二十二年に市役所となった。今は市役所の表の小路である。

勾当台通 (こうたいどう)

「なに一字ちがいありとてことごとしきみは政宗 われは政一」
仙台開府の頃、市街東端の丘に定禪寺を鬼門封じに置き、政宗は狂歌の上手な花村勾当を知って、その丘に屋敷を与えたので勾当台と呼ばれ、その前の北四番丁から定禪寺通までの通りを勾当台通といった。



二番



鉄砲横丁 (てっぽうよこちょう)

北目町と東北大学の構内となった桜小路との間の通りで、西の方に九軒の武家屋敷があった。北目町南角に鍛冶屋があったのでこの名がでたのである。市制施行のころ東に延長され清水小路東華学校前に通じた。古者は東華通りとも新丁とも呼んだ。

東三番丁 (ひがしさんぼうちょう)

昔は侍丁で、北端の小高い所に大聖寺聖天様があり同心町に接していた。南は清水小路に入っていたが明治中頃五橋まで通じ、宮城女学校や河北新報社ができた。弁護士、医者が多い屋敷町であったが、戦後は県庁から真直な通りとなった。

三番

二本杉通 (にほんすぎど)

二代藩主忠宗のとき、城下東北杉山台に町割りが行われ、杉山の名のつく通りができた。二本杉通には小身の組士が置かれたが、後に空堀丁から北七番丁まで通じ侍丁となった。北端にある町名ゆかりの翁姥の二本杉には朝日巫女の伝説がある。

北一番丁 (きたいちばんちょう)

広瀬川崖上の支倉町から東に真直に一キロ余、宮町に至る侍丁である。最初二日町以西、次いで二本杉通まで、東照宮がでると宮町まで延長された。幅五間四尺の大通りで大身や中堅武士が多く住んでいた。この場所には東北農政局があった。



四番



大町三丁目横丁 (おほまちさんちようよこちょう)

大町三丁目の東端から国分町に並行して肴町を横切り、立町に至る細い横丁で、大町以南は本荒町に連なる。大正初年には横丁をはさんで魚市場があったので、人の通りも多かった。

肴町 (さかなまち)

大町と平行した北の通りで、国分町と元柳町間をいった。御講代町として肴類の専売と御日市の特權、藩からの補助金があり、藩主御用の魚を献じた。問屋、仲買、宿屋、飲食屋、仏師など雑多な人々が住み、戦災で焼失するまで活気があった。

No.	設置年度	町名・通	設置場所
36	S 58	新寺小路/二軒茶屋	市道清水小路多賀城線歩道上
37	"	河原町/河原町横丁	大井時計店前
38	"	覚性院丁/石切町	小梨石材店前
39	"	土橋通/十二軒丁	菅原工務店前
40	S 59	山上清水/唸坂	八幡坂ロイヤルマンション前
41	"	茂市ヶ坂/元寺小路	第一日本オフィスビル前
42	"	木ノ下/東街道	猪岡内科医院前
43	"	六道/辻	J R北目町通ガード入口
44	"	鹿落坂/越路	エスパシオ向山前
45	S 60	森徳横丁/百騎丁	第一生命タワービル南側
46	"	堤町/奥州街道	宮城調理師専門学校北東
47	"	瑞鳳寺前丁/霊屋丁	瑞鳳殿参道下
48	"	道場小路/弾正横丁	東北大学本部北門前
49	"	大坂/大町頭	大町警察官派出所前
50	S 61	本材木町/本櫓丁	アーバンハイイツ立町前
51	"	鉄砲町/明神横丁	和光神社境内
52	"	東七番丁/柳町通	仙台鉄道郵便局前
53	"	名掛丁/日吉丁	日吉ビル前
54	"	新伝馬町/東五番丁	須田ビル前
55	S 62	北鍛冶町/北五番丁	竹に雀伊沢ビル前
56	"	南材木町/竹屋横丁	喫菜ステップ前
57	"	南染師町/南石切町	メイツ南染師前
58	"	北材木町/跡付丁	市道木町通本材木町線歩道上
59	"	原町/大源横丁	羊屋洋服店前
60	S 63	八幡町/作並街道	大崎八幡神社表参道入口
61	"	二十人町/榴ヶ岡	宮城県図書館前
62	"	比丘尼坂/燕沢	佐藤与七氏宅前
63	"	舟丁/堰場	高柳病院前庭
64	"	今市/塩竈街道	今市橋歩道上
65	H 1	亀岡町/山屋敷	平間酒店前
66	"	東八番丁/八ツ塚	サンシャイン菊平ビル前
67	"	虎屋横丁/糠蔵丁	いたがき果物店前
68	"	土樋/姉齒横丁	菅原園愛岩橋店前
69	"	荒町/石垣町	佐瀬歯科医院前

五番

上杉山通(のみぎさきまち)

藩政初期杉山台開墾のとき北一番丁から四番丁までで、延宝年間には北九番丁まで侍屋敷ができていた。その後北六番丁以北は田畑になった。幕末侍屋敷の割り余しは御酒屋の伊沢に与えられた。大正三年伊沢半左衛門は勝山公園を開いた。

北四番丁(きたよちばなち)

土橋通から東に宮町西側の左近衛主君を津田氏の広い屋敷につき当たる長い侍丁であった。七代藩主重村は意に合わず津田氏を改易し、四番丁は屋敷を抜けて宮町に運した。明治年間木町通小学校、大学病院ができて、電車開通で勾当台通以西は八幡町まで広がられた。



六番



定禅寺通(じやぜんじやまち)

東三番丁の北端にあつた定禅寺の門前から西の通りをい、国分町で定禅寺通櫓丁に変わる。大正初年大聖寺の敷地を切り割いて東に伸び錦町(車丁)に連なり、市電開通後次々広げられ現在に至つた。明治初年定禅寺跡に陸軍病院ができて、戦後その跡に国の合同庁舎ができた。

東一番丁(ひがしよちばなち)

寛文のころ玉沢櫓丁北西角に練藏の倉があつたので北半を練倉丁とも呼んだ。五百石の山家豊三郎は維新後邸内に数十戸を建て山家櫓丁と称し、以来国分町の裏町として芝居小屋、映画館、茶店ができて、大学の拡大、三越の進出等で賑わい、戦後は東北一の商店街に発展した。

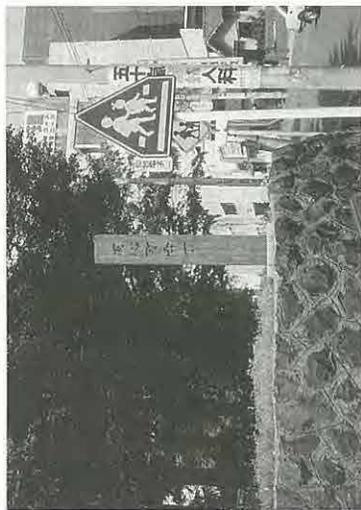
七番

大仏前(おほぶつまえ)

龜岡八幡は錦町公園の地にあつた。八幡が移ると天台宗尊寛院ができて、境内の延壽堂には四代綱村の奉納した丈六の釈迦木造座像が安置された。花京院から元寺小路に至る坂道は大仏前とよばれた。大仏は空襲で焼失した。

同心町中丁(ごうしんぢやなかまち)

天和三年龜岡八幡を川内に移した。別当寺千手院の入口は今の元貞坂である。この坂の両側は寺と神社の門前であつたが、跡は同心衆の住居とされた。元貞坂の中頃から東に引なりに、同心屋敷の中を大仏前にする細い道を同心町中丁とよんだ。



八番



定禅寺通櫓丁(じやぜんじやまち)

国分町、定禅寺通角に火見櫓が建てられたので、その以西が定禅寺通櫓丁とよばれたという。侍丁であつたが、明治初年常盤丁までつきぬける道となった。戦後拡張され、けき並木で有名である。

元常盤丁(もとせきばんぢや)

明治十年代五平丁を北に延長して崖の上を造成し遊郭を国分町から移した。川向かいの兵舎に三味線の音や太鼓が聞えたので遊郭は小田原に移され、元常盤丁と改名。電車開通の際北四番丁に通じ、戦後公会堂、市民会館等ができて面目を一新した。

九番



元柳町(もとやなぎぢや)

御譜代町で仙台開府当時大町以北片平丁の東裏におかれ、茶の税を免ぜられた。侍が多くなると寛永初年柳町は移され元柳町と改名侍屋敷となった。のちには本櫓丁の西端も元柳町とよばれた。電車開設で道幅が広がられた。

立町(たてぢや)

広瀬川の国分町以西をいう。御譜代町の二つで三日町、新佐馬町、穀町とともに幕末には四穀町と称され穀間屋が多かつた。西端に兵具方御職人衆が住み、刀匠初代国包もこの辺に住んでいたと伝えられている。

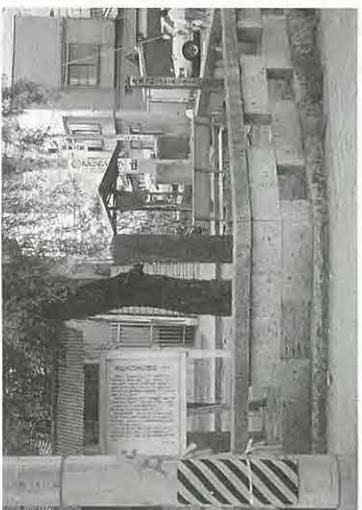
十番

教楽院丁(きやうらくいんぢや)

慶長の頃大日堂の所に修験教楽院ができた。その後柳町が移ってきた。幾度か火災にあい幕末教楽院は大日如来を本尊とし大日坊とも称した。明治初年修験は禁止され大日堂となり、末申歳生れの一代守本尊として信仰を集めた。

柳町(やなぎぢや)

伊達氏の御譜代町で茶の税が免除され、裏には茶畑があつたという。初めは元柳町におかれ、寛永初年南町と北目町の間に移され奥州街道筋となった。商人と御職人の町で田舎銅壺屋は最も古い店の例である。



十一番



長刀(ながやなぎ)

古くは空櫓丁から光禅寺通、中杉山通をへて同心町までの丁で巨石前後の侍が住み、米無ともいつた。元禄の頃長刀の刃のように曲つて外記丁に通り抜けたので外記丁米無ともよばれた。この曲つた北に明治中頃宮城師範学校ができて、その東に知事官邸があつた。

外記丁(げきぢや)

政宗が岩山に移つたとき五十石の武士斎藤外記は政宗の命をうけ、いらい教度刺客となり他領に出むいて脱藩者を討ちあるいは捕えた。恩賞として自分の住む通りに外記の名を許されたという。大阪の陣の功も加えて五百石を与えられ足輕頭となった。外記丁とは花京院通から北一番町までで、その北を外記丁通という。

十二番

支倉通(せくらぢや)

もとは支倉丁の西北端から北九番丁角の恩慶寺前に至る通りであつたが、旧仙台二中、大学病院ができて北四、北八番丁間が中断された。その後北方は秀林寺東側をへて延長され北山町につき当たつている。藩政時代北六番丁以前は侍丁であつた。

支倉丁(せくらぢや)

北一番町西端から広瀬川の崖にそつて西北に進み、細い溝にそつて急坂を電光型に南に下り、支倉橋で広瀬川を渡り、川内の元支倉丁に通じた幹線道路であつた。元禄七年夏洪水で橋が流れ、瀬橋が新たにできた。この丁名は道沿いに支倉氏が住んだためという。



十三番

通町 (とほろまち)

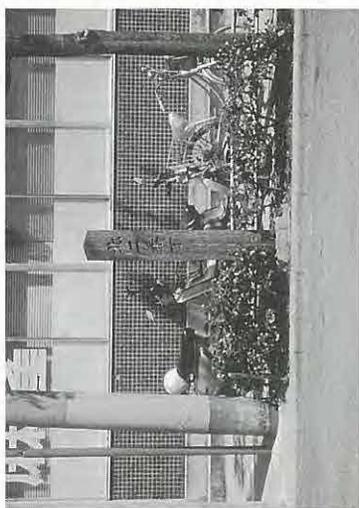
盛岡、八戸、一の関各藩の行列が橋を立てて通った奥州街道筋で仙台北入口の御足軽、御職人の町。堤の土手から光明寺、東昌寺の門前を通り青葉神社前の所から南に折れ、いまは通町に含まれた新日形町の低湿地をへて北嶽通町に至る。

北山町 (きたやま)

仙台城の鬼門北端の南面する丘に伊達氏ゆかりの禅寺が置かれた。通町つき当たりより西の麓の通りを北山町とよんだが、付近に浄土宗、曹洞宗の寺院も配されて寺町を形成した。寺支配の門前もいまは住宅化し商店街となった。



十四番



堤通 (つみどろ)

寛永年間北四番丁までであった通りは、その後北方堤下まで武士と御職人の屋敷となった。しかし藩の衰えと共に北六番丁以北は田畑となり、幕末には鉄砲稽古場がおかれた。維新後再び田となり、大正末稽古場の塚を含めて旧制二高が堤通北端近く東側にでき、戦後農学部となった。

北二番町 (きたにばん)

開府以来東に延びて宮町に通じた侍丁。西は広瀬川岸上で支倉丁に連なる。幕末江刺上口内の領主千八百石の中島邸が西にあり、中杉山通角に一枚八分(七、八俵)の画堂荒川暁海、宮町裏には三十石前後の大番士が住んだ。

十五番

五橋通 (ごはしどろ)

西は上染師町から東は運坊小路の西入口までを言う。清水小路との十字路口には明治初年まで大小五つの石橋があったので五橋と言った。この通りはここに通ずる路の意。同四十三年五橋中の前身東二高小が設置され、その後各種の学校がここを校舎として発祥した。

上染師町 (かみぞりまち)

北目町南端から田町北端までを昔は染師町と言った。この称は染師の居住によることは言うまでもない。絹織物を扱い藩主並びに諸士の御用を勤めた。町職人は隣接町にも住んでいたので運坊小路五橋通七軒丁を通じて染師町通とも呼ばれた。明治以後南染師町に対して上染師町と呼ばれた。



十六番



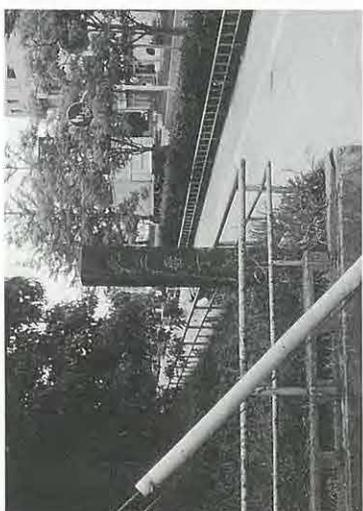
新坂通 (にぎさきどろ)

新坂の北端から以北。明治末まではまっ直ぐ北山輪王寺下まで通じていた。北八番丁までは侍屋敷、以北は寺屋敷、御足軽、御坊主、御職人の町であった。北七番丁から西に大願寺に通ずる広い道を大願寺通という。東北大学医学部が建ててから北四、六番丁間は中断されたが、南北の門は常に閉めない条件である。

新坂 (にぎさき)

水害で支倉橋が流されるので、元禄七年(一六九四)巖壁が新たに築設され、橋から支倉上方面に通ずる道を川沿いに開き俗に弁慶岩といわれる岩崖を切って急な坂道を作った。そして北二番丁の西端(知事公館門前)までを新坂と呼んだ。坂はそれ以来幾度も切り下げられたが坂の途中の清水は古い。

十七番



細橋丁 (ほそはしぢょう)

藩政時代以来、大町三丁目から北五番丁まで幅三メートルの細い通りであった。侍屋敷。本藩最初の学問所は北三西南角にあった。明治以後は各種小商店の並ぶ庶民のマチとなった。もう一つの名物は同二十九年設立の聖公会の活動である。戦後、近代的な大通りとなった。

北三番丁 (きたさんばん)

西は土橋通南端、へくり沢の切通しを越えて十二軒丁に続く。寛永の頃待まちができ、上杉山通以東に延長されて歩者屋敷とされた。ついで宮町まで武家屋敷が並んだ。延享三年道に堀が作られ、二日町東裏から四谷堰の水が東流した。

十八番

北目町通 (きため町どろ)

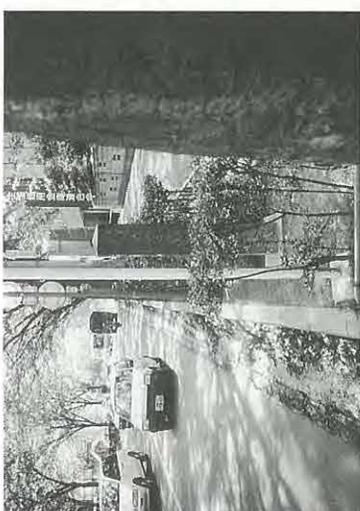
北目町中頃から東方東九番丁運池報恩寺に至る通りである。鉄道敷設いらい線路の東は裏町となり、北目町通のガードのみが東西を結ぶ通路となり混雑した。いらい百余年改良もされず今日に至った。ガード以西には東北学院、宮城女学院、河北新報社、仙台鉄道管理局がある。

北目町 (きため)

柳町と上染師町との間。関が原の戦の際政宗が本陣とした北目城下八十八軒を開府直後移した町という。十二月御日市の利権が与えられ御礼場のある宿場町で、守護は二十三夜さんと呼ばれる勢至観音である。幕末明治初年には国分町と共に大いに栄えた。



十九番



本荒町 (ほんあらい)

本荒町は開府当時岩山から移ってきた廻屋町であったが、寛永初年街道沿いのより長く広い今の荒町に移された。以来本荒町とよばれ、藩の医者が多く住む侍丁となった。戦後良覚院丁は青葉通に含まれ、本荒町も姿をかえた。

良覚院丁 (りょうかくいんぢょう)

本山修験東北一の大先達良覚院の北と西を十字に囲む通りであった。良覚院は政宗以来仙台以北を襲したが、明治初年修験宗は禁止され、事業家佐助が保存して市に寄付した庭園(良覚院丁公園)に名残をとどめている。北側の通りは青葉通に吸収された。

二十番

電話橋丁 (でんわはしぢょう)

良覚院丁の南町と本荒町の間をいった。明治三十三年十二月二十八日郵便局と並んで電話交換局が完成し業務を開始した。大正八年局の近所から出火した「南町大火」と空襲で局舎が焼けるときのほか、日夜業務が続けられたので、いつからか電話橋丁と俗称された。

南町 (みなまち)

仙台の真中、国分町、芭蕉の辻、南町と続く奥州街道の繁華街で、藩制についできた譜代町である。野菜、穀物、荒物を業としていた。明治初年に郵便局、警察署、旅館、やがて銀行ができ、市電も辻まで通ったこともあった。空襲で全焼し戦後町は面目を一新した。



北五十人町 (きたごひゃくにんまち)

薄前寺来迎寺前から東に角五郎表町につき当たる町で、古くは旗本御足軽五十人衆が住み、東端には御職人衆が住んでいた。旗本御足軽は他の御足軽よりは待遇がよく、年間玄米十八俵以上で、多きは数十俵をうけていた。

薄前丁 (うすまへちやう)

八幡町の西端にある鶏沢の水は、観瀨院観音堂の裏から広瀬川の崖にかかる滝となる。この崖に平行して八幡町から牛越橋に至る坂道を薄前丁といい、南に侍屋敷北に浄土宗昌繁寺の末寺来迎寺があった。寺内にはモクリコクリの碑と称される弘安の碑がある。



光禅寺通 (ひかりいん)

杉山町割のときできた通りで、花京院通から北四番丁につき当たる。北二番丁東北角に青葉山から移された地藏堂があり、別当光禅寺が町名の起源といわれる。電車開通後駅前から真北の便利な通りとなった。

錦町 (にしきまち)

寛永年間にできた侍丁で長丁と呼ばれ、同心町から東六番丁に通じた。明治中期に定禅寺通と結ばれて便利になり、電車開通で西半が広げられた。名取郡長町が市に編入後、紛れ易いので昭和十年に錦町と改名した。

片平丁 (かたひらちやう)

古くは北一番丁角から川ぞいに崖上を南下し、いまの西公園西端を通り、藤ヶ崎の上から東南に向かい南六軒丁に続く道をいった。川に面し伊達安芸や原田甲斐など大身の武士が住み、道幅も広がったので、大名小路とも呼ばれた。明治以降官衛学校町となった。

琵琶首町 (びわくびしやう)

琵琶の形に広瀬川で三方が囲まれた地形の北端を琵琶首という。片平丁から段丘に下る所が藤ヶ崎である。琵琶首丁はこの段丘の下を弓なりに大橋東側に至る。昔は御小人と御職人の町、今は東部が商店街となった。町の西に藩の花壇があった。



大町 (おほいまち)

御講代六ヶ町の筆頭として御城御見通しの町に、元柳町角から東へ、東二番丁角まで五丁に割られ、それぞれ古手、木綿、呉服、小間物、油筒の専売権が与えられた。特に一、二丁目には城下きつての豪商が住み、領内経済の中心であった。

国分町 (くにわけまち)

大町三、四丁目の境芭蕉の辻から北二丁目まで。開府の際国分寺門前町を移したという。毎年馬市が、また毎月一日から十一日まで伝馬差着の駅、年末には歳市と、特種の多い町として栄えた。明治初年電馬十九軒あり、十九軒店として宣伝した。



青葉通 (あおばちやう)

第二次大戦後復興の際できた通りで、駅前裏五番丁から新たに良寛院丁と結んで広い通りを作り大町頭に至った。広瀬通と共に東西に走る仙台を代表する大通りである。名は市民の投票で定めた。

東二番丁 (あづまにばんちやう)

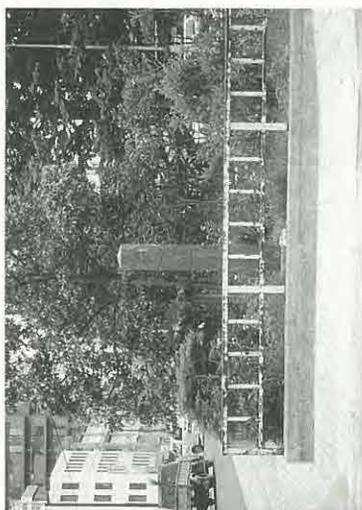
東一、三番丁は共に南北に走り平行した侍丁で、中堅武士が多く住み馬で出陣したので百騎丁とも呼ばれた。東二番丁は定禅寺通から五橋通までで、幕末には医学館や町奉行役宅があり、明治には小中学校、裁判所、憲兵隊、銀行、官衛の町となり、戦後道路拡幅で大通りとなった。

鹿子清水通 (かじしみずちやう)

古くは、片平丁東端から南へ広瀬川の徒渉場を下る坂道で、北西角に鹿にまつわる伝説を持つ鹿子清水があって、この町名の由来となった。南端河岸に縛り地蔵があり、刑場に使われた時期もあったという。

米ヶ袋 (こめぶくろ)

片平丁を口に見たてると三方を広瀬川に囲まれた小島の多い全くの袋地帯である。縦三丁、横六丁に割られ、全部御鷹師が住み、鷹匠丁、鷹屋通、餌差丁等の名があったが後に鹿子清水通へ、中の坂道、御鍛冶屋前丁の縦と、上、中、広、下、十二軒の横の丁名となった。



南町通 (みなまちちやう)

古くは、南町から檀岡下金勝寺門前までをいった。道幅六尺の細道で東の番丁を横切り侍屋敷の庭木の枝が道路におおいがぶさっていたという。駅ができると九間道路となり、柳と桜の並木が植えられ、仲見世も立った。市電通過時には十二間に拡幅され西にのび一時多門通と命名された。

狐小路 (きつこみち)

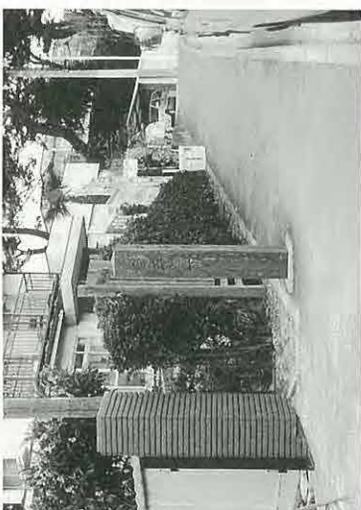
袋町と良寛院丁の間で、大身の屋敷や良寛院の東裏、本葉町の西裏の細道で藪が多く濠政中期まで狐が出たという。のち東側は侍屋敷に割られ、明治には旧原田甲斐屋敷跡に裁判所、但木土佐邸跡は片平丁小学校となり、袋町突き当たりは監獄署の力ラタチ垣であった。市電開通の時南町通と交わった。

角五郎丁 (かどごろうちやう)

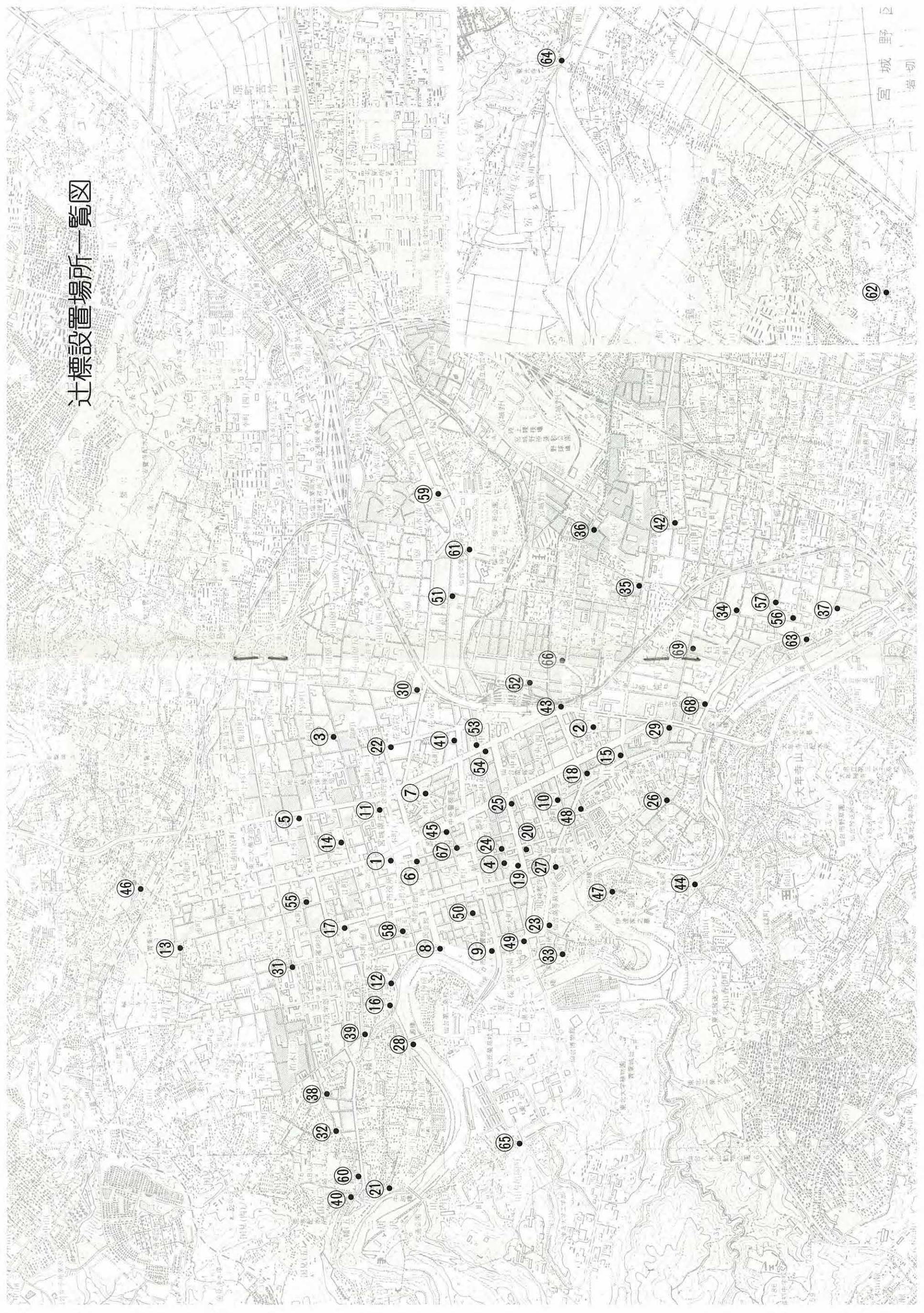
渡守角五郎の名から丁名ができたという。昔は御職人の町で、後に御旗本足軽の丁となった。薄橋ができた頃、新坂、へくり沢を越して川岸沿いに瀬町、中島丁新坂と交叉し、角五郎丁と連なった。西南の川岸に木場があったが幕末には講武所になった。

中島丁 (なかしまちやう)

この地は北十二軒丁との間にへくり沢があり南は広瀬川に向かって、薄前丁、角五郎丁が一段低く中島のようになっているのでこの名ができた。へくり沢の土橋から又五郎坂を登り、薄前丁まで行く侍屋敷であった。元禄八年薄橋の完成と共に中島丁新坂が開かれた。



辻標設置場所一覧図

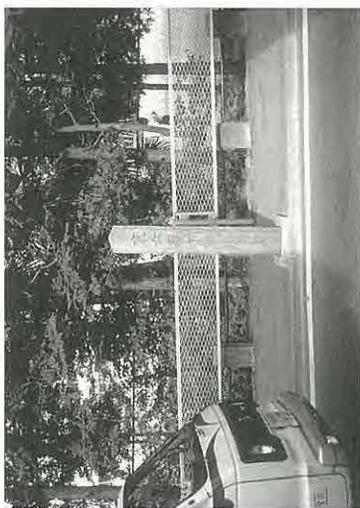


田町 (いなち)

上染師町から荒町に至る間で古道に沿って開府前から家が並んでいたという。仙台築城の時手伝の功により紙の専売権を与えられた。仙台指入御通町として荒町がこの東に移されるまで城下の南の玄関口となっていた。

清水小路 (しみずこうじ)

北目町六道の辻から田町荒町の境までを又小路といった。幅広い道の中央の堀を清水が流れ両側に上級武士の屋敷があった。鉄道敷設のとき東照宮から一直線であった道は駅付近で寸断され、小路は学校、工場の町となり電車が通り、愛宕木橋ができ明るく変わった。



花京院通 (はなみやうどお)

外記丁、同心町角から段丘の上を車道に至る通りで、花京院という修験は光禪寺通の西北角にあった。汽車が通ずると段丘は切り割られ陸橋ができたが、路は穴底の踏切となった。市電開通により拡張されたが今度は登り坂となった。

東六番丁 (ひがしむぼち)

古くは清水小路の北詰、六道の辻の北をいったが、東照宮の落成の頃宮町の南に続けられ、中に職人町をばさんで侍丁とされた。東六番丁小学校の地はもと覚性院があり、ついで東照宮御旅宮(おかりみや)となり、狐の話で有名であった。駅ができたので一直線の路は切られた。

北六番丁 (きたむぼち)

古くは土橋通から北鍛冶町まで、南側を四谷塚が東流、宮町まで延長され、両側は侍丁となる。原田申斐保蔵の万日堂も建つ。明治以降北鍛冶町角に米搗水車がたち、道沿いの低地は田となる。大正末年この地に旧制三高がたち、戦後東北大学農学部となる。堰堤は地下に埋められ道幅広がる。

木町通 (きまちどお)

北山覚範寺前から教えて九丁目の、北一番丁で木町に続いた。角には安借、吉須など三巨石の武士。北八番丁以北には御足輕が住んだ。明治以降北四番丁東南角に小学校ができた。四丁目以南西側に旧制二中、宮城病院ができたが、今は大学病院構内となっている。



江戸町 (えどまち)

坊主町の南、八幡町の北、石切町の西に当たる。仙台開府の頃、江戸から招かれた棟梁重瀬清四郎政則とその配下の大工衆が居住し、江戸から来たという誇りから町名としたという。黒瀬氏は幕末には約五十石の番外士とされ、町には大工衆が住んでいた。

坊主町 (ぼんぷち)

天和三年龜岡八幡が祀られるまで、麓に住んでいた坊主衆の大部分は龍聖寺の東北、四ツ谷塚の北に移されて坊主町ができた。何阿彌と称した同朋衆の指導を受け、城内の装飾、案内、接待等に奉仕した。頭を丸めていたが、藩主や重役にも接するため礼儀作法に通じた。



花壇川前丁 (はなだんがわまへち)

開府当時橋をかけて政宗は花壇を訪れた。橋が流れた後は川に面した花壇川前を通った。その後寛文の頃は政宗に殉死した古田氏の子孫や里見重勝なども住んだ。花壇もその跡にできた堂形も流された幕末には川前は御小人の住地となり、戦後詩人晩翠も数年疎開していた。

琵琶音新丁 (びわおんしんち)

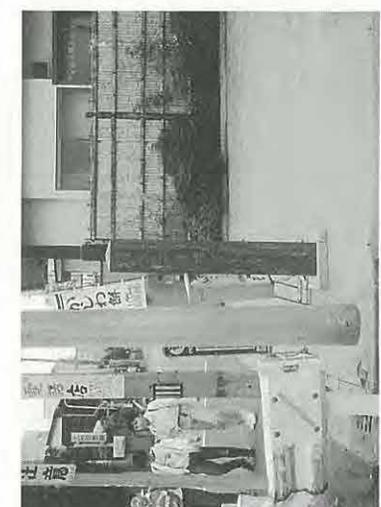
評定所は明治以降早川牧場となった。その西の道は元禄以前に延長されて花壇に達した。この道と川前を結ぶために元禄七年十数軒の屋敷の並ぶ琵琶音新丁が開かれた。幕末にはお城と御作事方に出仕の人が住んだ。牧場跡も今は高層マンションの敷地となった。

穀町 (こむち)

藩政初期から奥州街道荒町南鍛冶町に続き南端は城下町特有の鉤型で南材木町に連なった。高橋屋儀右衛門が権利を与えられて穀物問屋を開いたので穀町の名が生まれたという。明治末にメソジスト教会ができたが今は保育所となった。伝統の七夕の町で知られている。

豊屋町 (とよやまち)

穀町の東裏六十人町の西端約二丁の所に藩の豊御職人が多く住んだ一画があったのでこの名が生じた。大正五年カトリック教会が創建され穀町のメソジスト教会と共に仙台南部の教化に尽くした。戦後はその附属幼稚園が設けられている。



長泉寺横丁 (ながいずみでらよこち)

妻坊小路元茶畑筋向かいから新寺小路に至る道で、西側に長泉寺があった。この寺は松普寺五世により建てられたが、連坊小路にあった松普寺が焼失したため明治二十一年これと合併し現在の松普寺となった。遠藤日人、山内耕畑、早川智寛の墓があり、山門は若林城門を移築したものと伝えられる。

連坊小路 (れんぱくこうじ)

陸奥国分寺二十四坊のあった木ノ下に通ずるためこの名をもつ。開府の後足輕町とされ、背後に寺院が置かれた。明治二十年鉄道が町を横ぎり、その後一高・二女高が建った。表通りの商店街も戦災を免れて活気を増し、近年は道路拡張が進められて次第に構相を変えつつある。

二軒茶屋 (ふたのちや)

新寺小路東端と宮城野を通る東街道とが交わるあたりに、宮城野原を見渡せる大久保・鹿島の月見茶屋が幕末からあった。これを二軒茶屋と呼び、やがて小字名となった。戦前は付近に荒井氏別邸や騎兵隊があったが、戦後都市化が進み練兵場跡は総合グラウンドに名残をとどめている。

新寺小路 (にいしんこうじ)

寛永の後期、寺小路の寺の一部がこの地に移され、在来の寺と共に寺町を形成、新寺小路と称した。由緒が古く仏像等の文化財や著名人の墓がある寺も多い。近年都市計画によって道路が拡張され、墓地は縮小または豊岡に移るなど明るく近代的な寺町に変貌した。



河原町(かわらまち)

往昔、広瀬川の氾濫で形成された河原地帯で川原町とも書く。渡し場をばさんで城下と在郷の境に位置し、城下・在郷から移住した商人や百姓が定着、寛文期に橋ができると長町宿とともに町は繁栄した。藩政初期創設といわれる青物市場の廃止、道路交通の発達に伴って町の性格も変わった。

河原町横丁(かわらまちよこまち)

寛永期末河原町から若林城を結ぶ道の西端としてできた横丁。寛文の地図には河原町から東へ向ける道として記載され、古くはその南側が広瀬川の磧(かわら)地と桃畑であった。明治十二年には若林城跡に宮城集治監(現刑務所)ができ、昭和に入って行人塚駅や仙台味噌の工場が新設され、町並みも東へのびた。



覚性院丁(あきしょういんちやう)

元は北六番丁。土橋通から石切橋までの間をいう。覚性院は寛永十九年、国分盛重の子実永が現東六番丁小学校の地に建てた寺であるが、東照宮造営のとき敷地が御殿宮となったため明暦元年この地に移った。町名はこの寺の存在に因むが、明治初年に廃寺となった。春日社は盛重の氏神と伝えられる。

石切町(いしきりまち)

一六六〇年代寛文の頃には、橋の東南部にお城出入りの御職人石切の屋敷があった。石切橋から八幡町に至るこの道は、城下と石巻・山形を結ぶ要路で人馬が絶えなかった。六両十人扶持の石切御職人の子孫小梨石材店に往時の面影が偲ばれる。

十橋通(じゅうはしちゆう)

大崎八幡北東から袖ヶ崎に至る深沢沿いの東側、北八番丁から北三番丁の間をいう。北三番丁と中島丁の間は沢で隔てられていたが、寛永から明暦まで十三年の間中島丁、角五郎丁の武家屋敷から人馬を出し、底礎を据え土橋を渡した。即ちこの土橋に通ずる道である。

十二軒丁(じふにけんちやう)

武家屋敷が十二軒並んでいたことに因む。土橋の北麓は巴谷という岩の高い難所であったが、天和年間岩を崩し十二軒丁に通ずる道を切り通した。明治十五年鳥頭坂・有巴坂を埋め新道ができ、有巴沢町、姥ヶ崎町とも呼ばれたが、旧十二軒丁が廢道となり新道に旧町名が残された。



喰坂(うつきざか)

寛永十五年(一六三八)仙台城一ノ丸が造営されるとき、国見峠付近から石材を掘り出し牛にひかせてこの坂を下り、川内まで運んだ。石切場から山上清水東端におりていく急な坂道を、牛の群れが力をふりしぼり喰り喰り下ったので喰坂(うなりざか)という。鰻(うなぎ)坂ともいうが、これは後世の訛りである。

山上清水(みやまづみ)

伝説に、弘法大師が錫杖を突き立てたところにかれることのない清水が湧き出たというのが名水・山上清水で、地名の起源ともなった。また、城下の西口にあたるこの地は人馬の往来で茶屋が栄え、茶屋町ともいわれた。山際には、市内を貫流する四ツ谷堰の源となる水路がある。

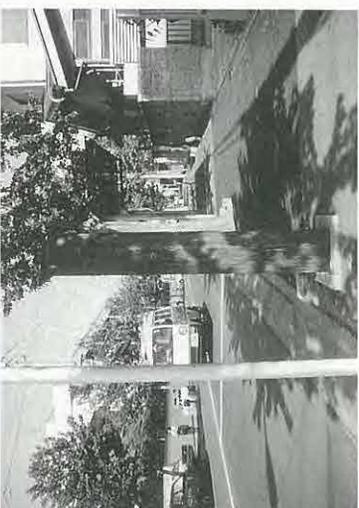


東街道(あづまかいち)

東街道は「みちのく」と「やまと」を結ぶ重要な交通路であった。県内では古代の史跡と伝説に富む多取平野西の山裾を通り、宮城野を経て陸奥の国府に至る。仙台に入ると、木ノ下の西を通り、陸奥国分寺を過ぎて多賀城に向かったと伝えられるが、詳細は定かでない。

木ノ下(きのした)

「みぎぶらい 御笠と申せ 宮城野の木の下露は 雨にまされり」(古今和歌集) 陸奥国分寺跡のある国辺木ノ下は、みちのくへの憧景を誘う歌枕であった。古来孝木大樹に包まれたこの地に、伊達政宗が薬師堂を、二代徳宗が白山神社を復興し、教多くの塔頭や坊が並んで繁栄をみたが、明治維新や近代の都市化の波が大きくまちの姿を変えた。



六道の辻(むちのつみ)

元来、国鉄東北本線ガード付近は宮町の延長東六番丁と北目町通りとの四辻であったが、東五番丁が南町・国分町と平行してここに割り込み、清水小路が水堀によって三筋に分かれ、計六本の道が集まる辻となった。幕末に龍川院跡地(現県スポーツセンター付近)に残っていた在路の六地蔵をこの辻に移したので、六道の辻と呼ばれた。維新後各町の改修や鉄道の開設等によって姿を変え、六地蔵も東九番丁の現龍泉院に移された。

元寺小路(もとてらこうじ)

県庁や錦町公園、白百合学園などのある段丘は、仙台城の鬼門にあたるので定禅寺や満勝寺など寺が並んでいた。この段丘下に沿った東三番丁から車町までが寺小路で、仙台八小路の一つ。寛永十四年頃寺の一部が移され、丁になると元寺小路と呼ばれた。小路の名は寺町や侍丁につけられた。

茂市ヶ坂(しげいちがさか)

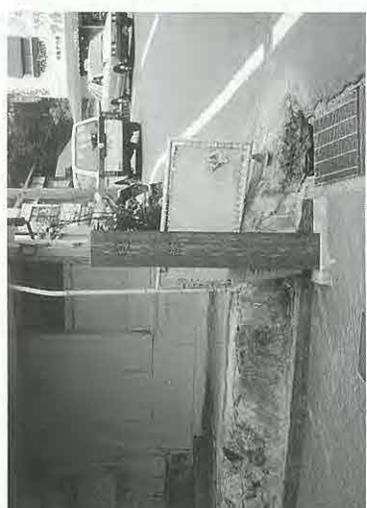
仙台七坂の一つで、元寺小路から花京院通に上る坂。真人茂市が住んでいたという。藩政時代、坂の西側と坂下から元寺小路東部は職人町だった。白百合学園敷地は、政宗夫人愛姫の母が建立し弁財天を本尊とした真言宗密乗院の跡地。明治三十二年から戦災時までには第二高等女学校生が坂を往来した。

越路(こしち)

越路は越えて行く道、また牡鹿が北鹿を恋うてかけ回る恋路の意味ともいわれた。東方の根岸に通ずる越路のうち、鹿角寺敷以下以西にはお路地の者(徒師)二十余軒がいたので、お路地町ともいった。昭和十四年長雨で南側翼の崖が劣化して流出したこともあったが、大正時代には採掘が盛んであった亜炭の香も今はない。

鹿落坂(しかおちさか)

鹿子清水、麓鹿袋(こめがぶくろ)、鹿落坂など藩政初期このあたりには鹿が多かった。元来険しかったこの坂も、八木山の開発とともに緩やかに幅広い安全な道となった。瑞鳳寺下の米ヶ袋への渡口は宝暦年間に新設。明治時代まで舟で渡し、大正四年に本格的な橋がかけられた。



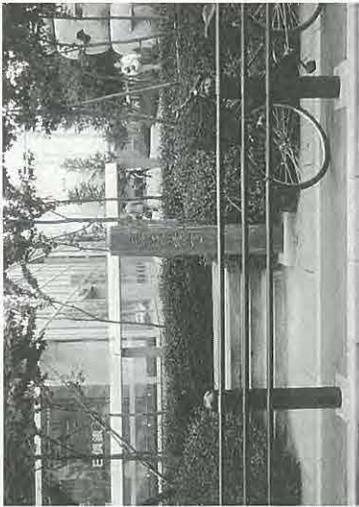
四十五番

百騎丁 (ひやくきやうぢ)

藩政時代、東一・二番丁は白石から数百石の中堅武士が配置された。戦時には多数の騎馬侍が出陣する東二番丁を別名百騎丁とも呼んだ。樹木が豊かで風格をそなえた屋敷町も、戦後の昭和三十三年に道が幅員五十メートルに拡張され、市内南北を貫く大動脈国道四号線となった。

森徳横丁 (もりとくよこぢ)

東一・二番丁間のこの通りは明治初期まで荒れて淋しく、化物横丁と呼ばれた。明治中頃西北端に芝居小屋・森民座が建つて森民横丁、後に森徳座と改名して森徳横丁と称され、更に北東端に裁判所ができて裁判所横丁、南東端にできた憲兵隊にちなみ憲兵横丁と時代を反映して通名が移り変わった。



四十六番



堤町 (つみまち)

仙台城下の北の入口として警備のため配置された足軽町。北山五山の東端・光明寺や鹿島神社のある鹿島崎の北東に大きな堤(溜池)があり、その土手は奥州街道の道筋となった。また茶屋町としてにぎわった堤町は、足軽の内職として始まった堤焼、堤人形を特産とする焼物の町でもある。

奥州街道 (おくしゅうかいだう)

江戸時代五街道の一つで、厳密には江戸道中と呼び、江戸十住から白河までを指すが、一般には青森県三厩までを含む。仙台藩では仙台以南を江戸道中、以北を奥道中と呼んだ。仙台城下では南から河原町・荒町・田町・国分町・北鍛冶町等を経由し、堤町が北端となる。明治四年に陸羽街道と改称した。

四十七番

霊屋下 (れいやしち)

霊屋下ともいう。仙台開府当初は経ヶ峯の西北東をめぐる広瀬川の流水を利用する染師職人が住んだが、霊屋(瑞鳳殿)造営の際南染師町に移され、かわって御小人衆(藩の雑用をする下級の役)が霊屋警衛のために配置された。経ヶ峯一帯は永く霊域とされたため、自然環境がよく保全されている。

瑞鳳寺前丁 (ずいほうじまへぢ)

寛永十三年(一六三六年)初代藩主伊達政宗公追遠のため創建された瑞鳳寺の門前町。寺の上手一帯が経ヶ峯で、政宗霊廟瑞鳳殿をはじめ二代藩主忠宗霊廟威仙殿、三代藩主綱宗廟善心殿、九代藩主周宗及び十一代藩主春義等の墓所がある。豪壮華麗な霊屋三殿は戦災で失われたが、近年復原された。



四十八番



道場小路 (みちばやちぢ)

柳町と弾正横丁を結ぶ南北の道で、兵法・武術家の中堅武士が多く住んだ。藩政時代前期に、王爺飛切りの術を得意とした剣豪・松林左馬之助(編也斎)が道場を開いていたのでこの町名が生まれたという。戦災復興事業で廢道となり、東一番丁と東北大学北門は新道で結ばれた。

弾正横丁 (だんせいよこぢ)

東北大学正門付近にあった岩田山館主伊達彈正の屋敷と北隣の角田龜主石川大和邸との間を、米ヶ袋鍛冶屋前丁から北目町に至る東西の道にこの名が付いた。明治初年に陸軍用地となって廢道。のちに旧制二高(現東北大学)の敷地となり、現在の金研の地にあった監獄署との間に新道ができた。

四十九番



大坂 (おおいさか)

仙台七坂の一つで、大町頭から大橋に至る坂。藩政時代は屈折した急坂だったが明治以後直線化・勾配緩和工事が進められた。南側には有事の際に大橋焼き落し用の備えとする竹籬(たかかき)が、また大橋たもとには肴蔵があり、中央の吹抜けが琵琶町と仲ノ町の通路となっていた。

大町頭 (おおいちがしら)

大町一丁目の西に位置し、大町一丁目頭とも称した。幕末の絵図では、大坂に至る道の南側に三沢信濃・石母田大膳、北側に大内縫殿・古内左近介といった重臣の屋敷が向かいあっている。明治九年、仙台初の博覧会(宮城博覧会)がこの地で開催され、明治天皇が臨遊された。

五十番

本材木町 (ほんまきまち)

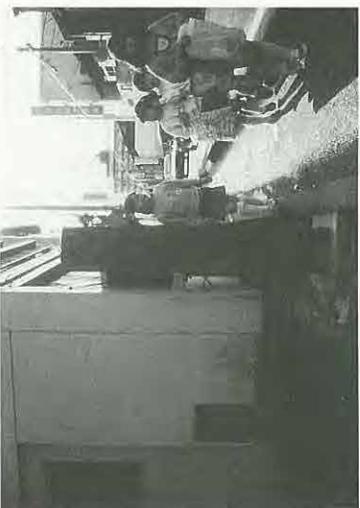
建築用材を集荷供給するため仙台開府当初に割り出され、材木町とも木町とも称した。その後木材需要の拡大に伴い北・南材木町ができたので本材木町と呼ばれた。一部は侍屋敷となったが、なお、材木商・大工衆・指物師が多く住んだ。明治以後は、国道西裏の商店街として栄えてきた。

本櫓丁 (ほんろうぢ)

藩政時代に国分町との角に火見櫓があったので櫓丁と呼んだが、その後定禪寺通(北櫓丁)、本鍛冶町(中櫓丁)にも櫓が建つたので本櫓丁と称した。警報は大鼓、後に鐘を用い、この櫓は元文三年(一七三三)勾当台に移った。もとは侍丁だったが、一部に職人も住み、明治以降は料亭の多いまちとなった。



五十一番



鉄砲町 (てつぱうち)

藩政時代、鉄砲足軽組が置かれたことに由来する町名で、総勢百三十八人の足軽が居住していたとの記録がある。城下の東口に位置し、町内のうち元寺小路寄りの部分が開府後早い時期に開かれ、のち寛文期までに東方へ発展したとみられる。城下の外にあたる原町との間には藩の米蔵があった。

明神横丁 (みんじんよこぢ)

鉄砲町とその南側に平行してほぼ同じ長さをもつ二十人町の中間を南北に結んでいる。元和二年(一六二六)、大阪の役から凱旋した鉄砲町の足軽たちが勧請し町内の守り神とした明神の小社にちなむ。和光明神と呼ばれていたが、明治維新後に和光神社と改められ、横丁に明神の名が残された。

五十二番

東七番丁 (あづましちぢ)

二十人町と荒町の間を結ぶ南北に長い丁。藩政時代初期には北が侍屋敷、南は足軽町で、後にすべてが仙台城の大番組に勤める平士たちの屋敷となった。かつては湿地帯だったので、谷地小路とも呼ばれた。明治二十年の鉄道開通で南北に分断され、昭和四十八年以後は再開発で一変した。

柳町通 (やなぎまちどお)

柳町に通ずる通で、藩政時代初期は柳町東端からここまでで、寛文期までに東の孝勝寺前へ延び、孝勝寺通とも別称した。明治二十年の鉄道開通で東五・七番丁間がほぼ失われて東西に分断、西部は宮城学院や東北学院、病院、官庁などがつくられ、東部は昭和四十八年以降の再開発で商業地区となった。



五十三番

名掛丁 (なげかち)

伊達氏が名を呼びかけて取り立てた名掛町の細土屋敷がおかれたまちである。明治二十年の鉄道開通で町内が二分され、駅から西は地の利を得て中央通東端の繁華街となった。駅の東翼は東北学院の教師として来仙した島崎藤村の下宿があったところで、日本近代詩の原点『若菜集』の作品群はここで書きつづられた。

日吉丁 (ひよしち)

かつて東五番丁は名掛丁が北端で、以北への通行は不便だった。明治末期にこれを解消するため日野屋と吉岡屋が敷地を提供し、元寺小路に通ずる私道を開いた。両者の隙をとりて日吉丁と呼び、明治四十年市道となった。戦後六車線に拡幅、東五番丁と一線になり、元寺小路以上も延長された。



五十四番



新伝馬町 (しんでんま)

城下町開設当初は日形町と称したが、延宝六(一六八八)年(一六七八)の仙台城下絵図からは新伝馬町となっている。国分町、北材木町、北目町と共に四伝馬町のひとつとして栄え、毎月二十六日から晦日までを担当、伝馬十匹を置いた。明治二十年の鉄道開通後も中心街を結ぶ商店街として発展を続けている。

東五番丁 (ひごぼち)

東一番丁からほぼ平行に割り出された侍丁のひとつで、名掛丁と北目町通の間を結ぶ。仙台城に動ける大番士の屋敷町だったが、維新後明治二十年の鉄道開通によって駅前地区となり、道路拡幅や南北への延長が行われた。第二次大戦後更に整備が進み、市街地中心部を貫く大動脈の一部となった。

五十五番

北鍛冶町 (きたかじまち)

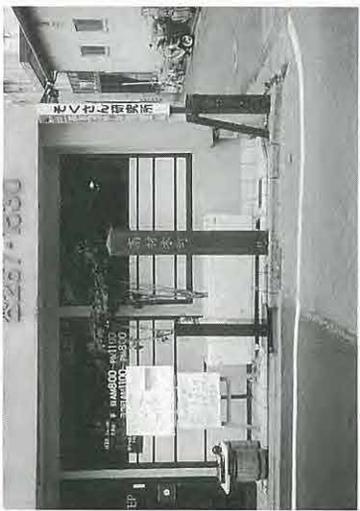
旧奥州街道筋の北四番丁と北六番丁間に位置する町名で、いわゆる町方二十四町のひとつである。城下創設の際に鍛冶職人を配置した一帯を、寛永末期ごろ侍屋敷とするため南・北の鍛冶町に分割、再配置して成立した。これに伴い、分割前のまちは元鍛冶町と称された。

北五番丁 (きたごぼち)

東は宮町、西は土橋通に至る長い侍丁で、正保年間(一六四〇年代)の絵図では北鍛冶町以西のみ侍屋敷が配置され、寛文期(一六六〇年代)までに宮町方面へ拡張された。江戸後期には度重なる凶作で荒廃し、明治末の現大学病院設置で木町通以西の大部分が寸断された。



五十六番



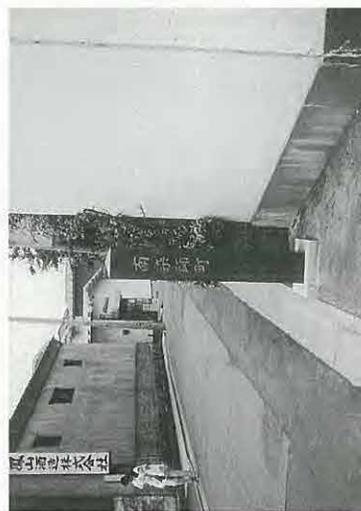
南材木町 (なまきぎまち)

寛永初期に城下を南方へ拡張する際に木材供給のため割り出され、当初は若林材木町と称した。城下町方二十四町のひとつで、材木のほか煙草の専売権も与えられ、江戸通中門口、後の国道沿いの商人町として栄えた。戦災を免れたため今も土蔵建築や町内神などが残り、昔日の面影を伝えている。

竹屋横丁 (たけやよこち)

南材木町と南石切町を結ぶ横丁で、かつて竹屋があったことに因む。竹は弓矢、旗竿をはじめ、建築用材や日用雑器などにも幅広く用いられるため特別の保護育成がなされ、他領への移出も禁じられた。集荷供給は専ら竹屋に扱われ、公用の竹は村々の御竹敷を設けて、採取を竹屋に行わせていた。

五十七番



南染師町 (なましりまち)

伊達氏に従って仙台に移り越路に住んでいた染師職人が、寛永十三年(一六三六)の政宗公墓所造営にあたりここへ移された。城下町方二十四町のひとつで、伊達御供を護る六軒を中心として七郷郷を利用しながら麗量の多い木綿染を独占的に扱って栄えた。京都から分霊された愛染明王は染師たちから厚く信仰されてきた。

南石切町 (なまきりまち)

寛永初期に城下を南方へ拡張する際、石材需要に対応するため石垣築をここに配置した。彼らは石工の本場近江朝から選抜されてきた人々で、特に細工物に長じ、伊達家ゆかりの墓所や社寺に灯笼、鳥居など数々の作品を残している。なお、町の南端は明治十八年に南材小学校敷地となった。

五十八番

北材木町 (きたまきぎまち)

城下町方二十四町のひとつで、慶長年間(一六〇〇年代初め)に本材木町から分離して成立したとみられる。材木商、大工・埴物師などが住む南北へ東西軸二つの町並みを形成し、材木の独占販売権を与えられて力を誇った。材木市が立ち、四伝馬町のひとつとしても栄えた。位置は変わったが春日神社も古くからまつられている。

跡付丁 (あとづけち)

通りの北側は北一番丁の侍屋敷、南側は北材木町の町屋と接し、これらと並行して侍屋敷が配置された東西軸のまちである。北一番丁南後(うら)町とも称し、繁華街に近いため太鼓持ちの別称である跡付衆が住んだことに由来するとの説もある。戦災復興事業で中央部の細橋丁付近が廃道となり、丁が東西に分断された。



五十九番



原町 (はらまち)

明治二十二年の南目、若竹、小原三村合併で成立した町名であるが、古くから塩竈街道沿いに細長い町場を形成し、城下東方では最初の宿駅として藩政期の絵図にもその名が記されている。西端には藩の米蔵や材木蔵が置かれ、明治(大正)期には代官所跡が宮城郡役所となった。昭和三年に仙台市と合併した。

大源横丁 (おおいしよこち)

遠藤横丁、岩井横丁、佐々木横丁とともに原町四横丁のひとつ。他の三横丁は南の宮城野方面への旧農道であるが、大源横丁は北裏への通路である。原町出身で仙台四郎の号取商を営み、藝藝家としても知られた大内源太右衛門(一八四七-一九〇九)の墓所により、明治三十八年に道が開通したことに由来する。

六十番

八幡町 (やまはたまち)

慶長十二年(一六〇七)落成の大崎八幡神社の門前町で、正保絵図に福直町、寛文絵図には龍宮寺門前町とあり、町屋ではあったが町奉行の支配からは除かれ、別当寺龍宮寺の支配に任されていた。城下西はずれに位置し、明治以後も門前町・茶屋町として栄えた。一月十四日夜の「ごんと祭」は仙台を代表する祭の一つである。

作並街道 (まなびがさど)

仙台城下北目町より駿子・熊谷根・作並の名宿を通り、標高五九四メートルの関山峠を越えて山形に至る道で、峠名により関山街道ともいう。峠は急峻で馬も通れず、荷は人足や牛で運んだといわれ、仙台・山形間の交通路としてにぎわつたのは明治十五年の関山トンネル開通以後である。昭和四十二年には新関山トンネルが開通した。

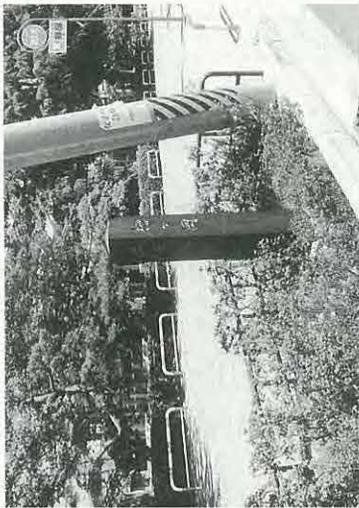


榴ヶ岡(づがおか)

古くから歌枕に詠まれたツツジの名所である。文治五年、源頼朝の平泉攻めに備え、藤原泰衡が陣をおいた護国館は当地という。幕府時代、薄生に集まった仙北などの米は、舟曳堀を舟でひかれ、吾竹村の米蔵に運ばれた後、宮城県図書館の東側にあった原町米蔵に運びこまれた。図書館の地には孝勝寺にある釈迦堂が建立されていた。

二十人町(にじゅうごまち)

二十人衆と呼ばれた足軽鉄砲組が置かれたことにその名が由来する。中程には矢立神社が祭られており、その境内は鉄砲の構装場となっていた。城下東方の真直に仙台城大手に通ずる位置のため、外敵に備えて町型を鉤形にし、道幅も狭くしたといわれている。明治以降は歩兵第四連隊などを顧客として次第に商店街となった。



比丘尼坂(びくにざか)

平将門が城ほされた時、その妹が相馬御所をのがれてこの地にたどり着き、比丘尼となって庵を結び、道行く人々に甘酒を造って売ったと伝えられる。この甘酒はのちのちまで伝わり、案内の湯豆腐や今市のおぼろ豆腐、今市足軽が内職として作った今市おこしなどとともに塩巻街道の名物となった。

燕沢(ぼらざ)

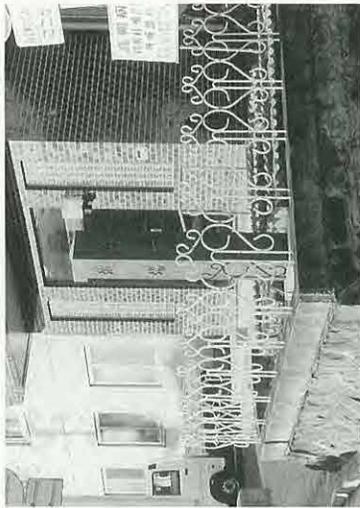
台原・小田原丘陵東端に位置する燕沢には多くの古墳や遺跡が分布し、特に燕沢遺跡は古代の布目瓦が出土することで知られている。大雄山善光寺には伊達家三代綱宗・四代綱村の位牌が安置され、その境内には俗に蒙古の碑と呼ばれる弘安五年(一二八二)の銘の石碑が建ち、裏山には市指定史跡善光寺横穴古墳群がある。

舟丁(ふねぢょう)

御舟衆(船衆)が居住したことにその名が由来する。城下外であった頃から水運を利した交通の要地で、広瀬川・名取川を通じて河口の閑上から米・材木などが当地まで運ばれていた。また牧野長町方面への運送は、河原町の長町渡ができる以前は、当町南と根岸村を結ぶ宮沢渡が利用され、城下に入る玄園口でもあった。

塩場(しほば)

宮沢渡の渡場に臨む広瀬川の地。広瀬川の流れを堰止めて甲水と水運に利用した大郷堰と土郷堰とに囲まれた所なので、その名ができた。高堰は四谷堰とともに仙台の三堰と称された。近くには若林米蔵・若林材木蔵が置かれ、このうち城下近郊の租米を収納する米蔵の警備には、三町足軽の一つ郡山村の諏訪足軽が当たった。



今市(いまり)

昔は冠屋とよばれた。歌名所の轟の橋(緒絶の橋)があり、近くには奥の細道も通っている。留守家旧臣の兵藤大膳が岩切村端郷の原野を切り開き、町場を建設した所で、寛永二年(一六二五)には町場住民が一括して三町足軽に取り立てられ、兵藤氏が代々組頭を勤めた。この今市足軽と福田・諏訪の足軽を三町足軽ともよんだ。

塩巻街道(しほまきかいどう)

石巻街道から岩切若宮で分岐する街道である。多賀城市南宮町市川間で砂押川を渡り、多賀城政庁跡の北を通り、塩巻市大日向・赤坂を縫って鹽巻神社に至る。赤坂橋を渡ると元禄頃の遺構とされる越後屋があり、鹽巻語の密に土産品を売っていた。母屋は藩公の休息所とされたが、腐朽が甚だしく昭和五十二年に解体された。



亀岡町(かめおかまち)

亀岡八幡神社の門前町で、町の長さは、町、町方二十四町の二十一番目の序列。四代瀬主綱村からの群の専売を許されていた。神社は綱村時代の天和三年(一六八三)に同心町から遷宮され、梁川今八幡の社名を亀岡八幡と改めた。坊主町と呼ばれていたときもある。

山屋敷(やまやしき)

元旗本足軽の屋敷町。山際に開かれたことから「山の根」とも称された。町内は山屋敷上丁・中丁・下丁・横丁・南丁・北丁の道筋があった。足軽の手内職であった山屋敷象嵌(ぞうが)と青葉山産出の埋木細工は有名で、燭台や火ばし、茶托などを作っていた。また、火付木も生産していた。

東八番丁(ひがしはちばんぢょう)

東七番丁の東真に並行して割り付けられた足軽屋敷で、柴田郡大河原村の足軽衆が置かれたので大河原町ともいった。南は荒町、北は二十人町に行き当たる。封内風土記には「八番丁以下今廢宅たり」とあり天明大飢饉をきっかけとする鎮内の荒廃の様相を知ることができる。明治三十八年には片倉製糸紡績仙台生糸所が操業を開始している。

八ッ塚(やっづか)

東八番丁の東部の寺屋敷である。昔一面の野畑であったその中に由来のわからない古塚が八つあったので、この名称がある。寛永十三・十四(一六三六・三十七)頃、城下の拡張に伴って今の元寺小路から寺院の一部をここに移したので、新寺小路と呼ばれるようになった。



虎屋横丁(とらやよこぢょう)

長崎の医師玄林が国分町東南角に薬種店を開いたとき、店頭に木彫りの虎を飾り虎屋と称したことに由来するといふ。国分町通から一番町通りまでの短い距離であるが、間には戦後にできた稲荷小路が走り、一番町、国分町という仙台の昼と夜を代表する繁華街を結んでにぎわいを見せている。

糠盛丁(ぬかもりぢょう)

東一番丁の大町以北の俗称で、その名は広瀬川の西北角辺に糠蔵があったことに因む。寛文八十九年(一六八九)の城下絵図には御糠蔵(ぬかわら)蔵と記されている。大町以南は塩蔵があったため「塩蔵(しほくら)丁」と呼ばれたが、この西丁からなる東一番丁は「一番アラ」の名を生み、東北随一の商店街として発展している。

土樋(とひ)

西端は鹿子清水、東端は石名坂に至る広瀬川北岸沿いの長い通り。「仙台鹿の子」によれば、その名は土の樋をかけて水を流したのに由来するといふ。正保仙台城絵図では西半部に侍屋敷と鷹師屋敷が割り付けられ、東には鉾差屋敷がみえる。政宗の祖父晴宗の時代に城があったという記録もある。

姉菌横丁(ねむしよこぢょう)

荒町から土樋の眞福寺門前までの南北一町程の横丁をいう。若林城普請に伴う寛永五年(一六二八)以降の城下の東南方面への拡張期に、土樋とともに割り付けられた。侍屋敷が置かれたが、居住者に姉菌八郎石衛門という者がいたことから、この呼称となった。明治の末葉には愛宕橋まで通じている。



(あ) 青東跡	第25番	42
葉街	42	42
付	58	31
歯	68	10
横	69	11
(い) 荒	69	22
垣	38	1
切	15	44
橋	64	34
(う) 今	40	24
唸	32	26
(え) 江	46	4
州	49	60
(お) 大	24	40
大	49	64
大	4	44
大	47	29
大	7	39
大	1	6
大	30	8
(か) 花	38	36
京	23	54
院	33	47
院	26	59
平	65	21
片	5	56
花	15	34
壇	37	9
川	37	29
前	3	48
通	55	35
(か) 鹿	21	68
子	55	61
清	58	14
水	17	46
通	14	28
(か) 亀	18	62
上	18	28
山	13	51
通	5	2
(か) 上	31	
染		
師		
町		
原		
町		
横		
丁		
(き) 河		
原		
町		
横		
丁		
(き) 北		
一		
番		
治		
町		
(き) 北		
五		
十		
八		
人		
町		
(き) 北		
五		
番		
木		
町		
(き) 北		
三		
番		
木		
町		
(き) 北		
二		
番		
目		
町		
(き) 北		
二		
番		
目		
町		
(き) 北		
四		
番		
目		
町		
(き) 北		
六		
番		

狐	第27番	42
木	42	42
木	31	31
通	10	10
院	11	11
丁	22	22
(け) 外	1	1
記	44	44
(こ) 光	34	34
禅	24	24
寺	26	26
通	4	4
台	60	60
通	40	40
路	64	64
(こ) 越	44	44
穀	29	29
国	39	39
米	6	6
分	8	8
ケ	36	36
(さ) 肴	54	54
作	47	47
並	59	59
街	21	21
道	56	56
(さ) 山	34	34
上	9	9
清	29	29
水	48	48
(し) 塩	35	35
竈	68	68
街	61	61
道	14	14
(し) 鹿	46	46
落	28	28
坂	62	62
(し) 清	28	28
水	51	51
(し) 塩	2	2
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し) 清		
水		
(し) 塩		
竈		
街		
道		
(し) 鹿		
落		
坂		
(し		